

# 観光施設メディアラボ

公益社団法人国際観光施設協会編



株鍋島緞通吉島家

原 佳久

## はじめに

絨毯は中央アジアからトルコ、中国などを経て世界中に伝わり、日本にもかなり早い時期に入ってきていたのですが国産の絨毯が生じたのは元禄（1688～1704）年間ではないかと言われています。

伝えられるところによると、有明海近くに住む農業を営んでいた「古賀清右衛門」が鮮やかな色模様を入れた木綿の敷物を織ったのが最初だそうです。清右衛門がその技術を学んだ経緯については諸説ありますが、使用人の中に外国人より織り方を習ったという者がおり、清右衛門が試しに織らせてみるとこれが美しく、自ら学んでその織り方を習得したといわれています。

当時この敷物はその華やかさから「扇町毛氈（オウギマチモウセ



鍋島緞通吉島家外観



花菱龍唐草縁まじ文

ン）」や「花毛氈（ハナモウセン）」と呼ばれていました。その評判を聞いた鍋島藩三代藩主鍋島綱茂侯は扶持米を与えて技術を保護し鍋島藩御用となりその製品は一般への売買が禁止されました。そして、扇町毛氈は將軍家への月並献上品に指定され、正月に將軍家へ10枚、老中に5枚など合わせて50枚ほどが毎年献上されていました。これが鍋島緞通のルーツとなります。

当時、庶民への売買を禁じていましたが、明治時代以降はその禁が解かれ最盛期には十数の織元が生れるほど栄えました。



蟹牡丹縁二重雷文

明治時代になると鍋島緞通は一般への販売が開始され、大島貞七という実業家が大々的に販売を手掛けていました。販路を広げるために外国や国内各地の博覧会に積極的に出品するなどして名声が高まり、鍋島緞通の名称が定着していったようです。

## 木綿でつくりあげる鍋島緞通

鍋島緞通の特徴は何といても、全てが木綿で出来ていること。世界各地に特色ある絨毯が伝えられていますが、その多くは羊などの獣毛でできています。ペルシャやトルコには絹で織った美術工芸品蟹牡丹縁二重雷文や、経糸だけに木綿を使ったものもありますが、鍋島緞通のように経糸（タテイト）・緯糸（ヨコイト）・織込糸まですべて木綿を使った絨毯は非常に珍しいようです。

なぜ鍋島の地で木綿の敷物が生



ショールーム



手織道具



手織風景



### 本物を百年後の未来に

1910年には佐賀市赤松町に住む吉島正敏が製造技術を受け継ぎ、今日の鍋島緞通の基礎を作りました。太平洋戦争中は技術を失わないよう、国から木綿糸の支給を受けて細々と機織りを継続しました。戦後に一時福岡県久留米市へ移転しましたが、2006年に佐賀市赤松町に「鍋島緞通吉島家」を移し、長年の念願であった故郷に腰を落ち着けました。

その社屋は、1階がミュージアムになっており、中央アジアからシルクロードを経て日本に渡ってきた鍋島緞通の歴史が概観出来るようになっていて、江戸時代から明治、大正時代の古い鍋島緞通を展示しています。

2階はショールームでゆったりとしたスペースに通常30～40点の製品をご用意しており、鍋島緞通の現在の逸品を間近にご覧いただけます。

鍋島緞通のような伝統的な製品は、織元の努力だけで作り続けていくことは不可能です。まず良質な木綿原料の確保、製糸技術、染色技術が必要になり、さらに製品を売るための販路を開拓し、大切に使用していただくお客さまへと全てが繋がって初めて本物が生き残るのです。織り手の技術はその通過点にすぎないからこそおろそかな仕事はできません。

「私たちは百年後に評価される。」と肝に銘じながら大切に織り継いでいます。

まれたのかというと、もちろん高温多湿の日本の気候に合ったということでしょうが、そもそもはこの佐賀の地で良質の木綿が産出されていたという事情がありました。鍋島藩は元禄年間、有明海で干拓事業を行っていました。干拓地を水田にするためには土壌の塩分を抜いて中和する必要がありますが、それには綿の栽培が適していました。しかも採れた綿は、たいへん上質なもので、その綿から紡いだ糸で「扇町毛氈」や「花毛氈」が生れたのです。

江戸時代は手紡糸でふわりと軽く織られたものが多く、長い毛足が流れて柄が微妙になびく素朴な味わいが特徴でした。明治20年頃より丈夫で均一な紡績糸が使えるようになり、たたき締めを強くしてきっちりした柄が織られるようになりました。

大正時代には、「大正モダン」の気運に乗ってデザインや織り方に新しいアイデアが取り入れられ、江戸時代以来の「蟹牡丹」に直線的な柄を加えたモダンなデザインも生まれました。